

特集
山のマチ、山のムラ

MESSAGE

いまでも息づく、山と生きる術

新潟県村上市山熊田は、山に囲まれた三十人ほどの小さな村。ここの突き抜けた田舎の暮らしに衝撃を受けて、私は山熊田のマタギの頭領に嫁ぎました。嫁がなければ何も継承できないと感じたとはいえ、突飛な人生ジェットコースターに腹を括ってしまうほど、ここの暮らしは興味深いのです。

お金を稼ぐ以外の、生きるための仕事は毎年ルーティンで、それをこの村は何十年、何百年と続けてきたわけですが、都市部育ちの私には圧倒的な非日常で、まるでおとぎ話の世界。山々の一角に間借りするように、自然と調和して生きる驕りのなさ、爺婆たちのおおらかで勤勉な様子は、生活が自然本位だからでしょう。そんな彼らの背中を追うのも大変なのですが、振り返れば全て理にかなっている驚きがあります。筋骨隆々の彼らを、私は超人かつ国宝だと思っています。

この村は、いまだに女人禁制の伝統的な猟法「巻狩り」で熊を仕留める慣習があり、雪が痩せた四月、十数名の男衆は山へ向かいます。峰に構えるマチバ（射止め役）のところへ、勢子が山をぐるりと囲んで大声だけで熊を山頂

へ追い立てる。そんな熊との命の駆け引きは、互いに命を預け合う仲間がいてこそです。授かった熊肉は巻狩り参加者に平等に分配され、大鍋で煮た熊汁も各家々に配られます。手柄や老若関係なく、皆で恵みを分かち合うのが当たり前で、大自然に対して弱者である人間の、皆で共生していく術にはグッときます。諍いを極端に避けるのも、根底に「共に生きる仲間」という意識が強いからでしょう。こういう感覚がすごく好きです。

夏から秋にかけての風物詩に「山焼き」があります。豪雪に閉ざされる冬の保存食として、大量の赤カブ甘酢漬けを作ります。伐採後の開けた山の斜面を畑として、草を刈り干し、杉の葉をかき集め、それらを燃料として一年で最も暑い日に人海戦術で山を焼きます。病害虫の被害を抑え、灰は土壌を中和し肥料にもなるし、数十年溜まった肥沃な腐葉土もたっぷり。林業と密接で平地の乏しい山の民の、凄まじい知恵です。この赤カブはピリリとワサビのような辛味が爽やかで、暗い雪国に鮮やかなピンクの色彩も嬉しい冬の食卓のアイドルです。近年は小規模化していますが、それでもなお大量に漬けるのは、お礼や

物々交換など、貴重な交易アイテムだからです。

私は、村に続く伝統的工芸品「羽越しな布」を継承しています。シナノキの樹皮から糸を作って布を織る、非常に珍しい古代布で、村中の婆が先生です。最も若い先輩は八十代と、危機的状況が続いていますが、制作方法が特殊で、伐採から織り上げるまで一貫して行うその技もまた、先人の知恵の宝庫。暮らしの中で生まれる大量の広葉樹の木灰や米糠を樹皮の仕込みに使うのですが、その化学的効果は驚愕です。山に自生する木の在処や村で年に三日だけと定める伐採日、村の中を流れる豊かな清流など、全てこの村で得られる素材、この環境ありきのものづくり文化なのです。

糸ひとつ見ても、外仕事の合間や朝晩、雨の日など、暇さえあれば糸を績みます。「績む」とは韌皮を割いて撚りつなげて一本の長い糸にすることで、その作業は一年中。冬になり、雪に閉ざされて外仕事が強制的に終わると機織りシーズンです。嫁が織り、姑が糸績みや糸車で撚糸にするなど機まわりの仕事と分担作業で、一年分の糸を一気に織り上げます。今では通年織るようになり、冬季も

除雪車が村まで来てくれるおかげで冬の生活も様変わりしましたが、根本的には変わりません。田畑に山菜きのこや工芸素材の採取、薪準備など季節ごとの仕事を優先し、それ以外で機を織る。日々、今しかできない最善をやる、という具合です。三年前に移住してきた新たな仲間と共に仕事をし、やっと織り上げた時の、代々続く繭車の一端にのような壮大な感覚も気に入っています。

無いものは自分で作り、大変な人がいれば助け合うのも当たり前。そうやって私たちの先祖も生きてきたはずです。便利な世の中はありがたいことだけれど、かつての私のように「生きていく力」の欠落を実感する機会、災害が増えてきました。「こんな生き方もある」という選択肢と、山熊田のような独特の伝統と知恵、人との関係性を持つ村を残せたら、どんなに強くて柔軟で面白い未来になるのだろう。それもまた豊かさや財産だと思うから、私はこの営みを続けていこうと思うのです。



大滝 ジュンコ
OOTAKI Junko

プロフィール

1977年埼玉県坂戸市生まれ。TUAD大学院修了。現代アート活動、執筆業、アートマネージャーなどを経て、新潟県村上市山熊田に移住。2018年「山熊田工房」立ち上げ、羽越しな布の継承、育成、振興に尽力している。第4回三井ゴールデン匠賞ファイナリスト、2024年度日本伝統工芸再生コンテスト クラフトリーダー賞受賞。著書に『現代アートを続けていたら、いつのまにかマタギの嫁になっていた』（山と溪谷社）。

糸に使わない外皮で染めた、しな布の暖簾（写真：大滝ジュンコ）